

祈りを——呪いをなかつたことじでできる。

その一言は、お先真つ暗な僕にはまさに射しこんだ希望の光のようにも見えて、もうなんか目の前の彼女が女神にさえ見えてさえいて、ついつい反射的に「マジすかじゃあ僕の祈り解いてください超お願い！」なんて頼みそうになつたし言葉が喉のどから出かかつたうえに身を乗り出してすらいたけど、すんでのところで耐えきつた。

「……マジで言ってるんすか？」

「敬語」

「……マジで言ってるの？」

「大マジよ。にわかには信じられないだろうけれど、私には確かにその力があつて、あなたは呪いのせいで希望のな

い毎日を通いしてゐる——まるで巡り合わせね。それとも私たちのどちらかがそのように祈ったのかしら?」

「……………」

そこでふと思ひ至る。

祈りをなかつたことにしてください——僕は確かに、ここ数日間ずっと祈り続けていた。

けれど。

「……本当に祈りをなかつたこととどこで生きるの?」

もちろん  
「勿論」

「でも、どつちやつて」

聞いたこともない。

彼女は手をかざして見せた。白くて細い指が、こちらに



「……なんか近くない？」

「近いほうが話しやすいでしよう？」

「触りやすいの間違いでは」

「……」

「ずぼし凶星か。分かり易過ぎやしませんかね。

「ま、まあそれは置いといて」 実に不自然な挙動で手を横に流す彼女。「で、どうする？」

「……痛くない？」

「……」

「待ってなんでそこで黙るの！ やめて！ 勝手に手を伸ば

さないで！ やーめーてー！」

「大丈夫大丈夫。たぶん痛くしないから。うふふふ……」

「うわあああああああっ！」

僕に触れようとする彼女と、その手を必死に抑える僕。  
なんだこれ。

「最近ちよつと解呪してなくて欲求不満なの。右手がうずく。の。やらせて？」

「なにその痛々しい子っぱい理由！ 怖いよ！」

「本当に大丈夫よ。もし痛かったとしてもそれは一瞬で終わるから」

「それ絶対に死ぬやつじゃん！ やだよ！ もうなんか不安しかないよ！」

「ご飯恵めぐんであげたんだからそれくらい我慢しなさいよ」「蹴わったお詫わびって言ったじゃん！」

「残念ながらそれに食後のコーヒーは含まれていないわ」  
「コーヒーと僕の命を天秤にかけないでくれるかな！」  
「あら。あのコーヒーは最高品種の豆を使っているのだけれど」

「僕の命は最高品種の豆以下ですか……？」

「あれはコピ・ルアクと違ってね、非常に珍しい豆なの」  
「せめて否定してよ！　というかその豆クソじゃん！」  
色んな意味でね！

飲んだことはなかったけれど僕でも名前くらいは知ってるよ！　どっかのネココから抽出ちゅうしゅつされた珍しいってだけのクソ豆コーヒーでしょ何つーもん飲ませんだ！